

平和會議に於ける我國の主張

戸田 海市

未曾有の大戦争も將に終りを告げんとしつゝあるが、元來戦争の主たる作用は舊生活を急激に破壊することであるから、各國民及世界全體の新生活は是れから建設せられねばならぬのであつて、平和會議の役目は實に此建設事業に正しき標準を與へることではなくてはならぬ。若し平和會議の決定が世界人類の發展に不適當のものであつたならば、其決定は久しからずして一片の空文となり、世界の平和は再び亂れて數年に亘る文明國民の大犠牲は殆んど無意義とならざるを得ない而して此破壊と建設とは本來同一目的の發展でなくてはならぬから、今後の建設を如何にすへきやは、今日まで吾人か何の爲めに戦ひしやを尋ねれば自から明かとなるのである。戦後の新生活の建設には二方面があり、一は如何に國際關係を定めて人類全體の共同生活を建設すへきやであり、他は如何に國內の社會階級の關係を定めて國民生活を建設すへきやである。此兩方面に付て世人は往々別異の原則を立てんとするのであるが、此の如きは理論上甚た不徹底であるは勿論、

今日の如く各國に於ける個人の日常生活が次第に世界交通と交渉を深くして人類全體の共同生活の内に組み込まれて行き、之か爲め一國の重大事件は忽ち世界の事件となるか如き時代に於ては事實上破綻を生ぜざるを得ない。

聯合國及米國の政治家か此戰爭は獨逸の軍國主義を破つて世界に民衆主義を確立する爲めてあると揚言したことは、獨り自國民衆の戰意を鼓舞するに必要であつたのみならず、世界人類の共鳴を生じて遂に戰勝の結果を得るに至つた。此戰爭を主張した個々の國の個々の政治家や識者か如何なる動機を有したにせよ、此戰爭は聯合國米國及中立諸國の民衆の軍國主義を打破して民衆主義を確立するの要求の爲めに戰はれたものであつて、又此戰爭は今後如何なる強大の國民も最早や自主能力ある民族に對し、武力に基つく所の權威を以て支配を行はんとする武力的の帝國主義の破産を宣言したものである。各國か平等の生存權を認め、相互の理解と同情とに由て世界的共同生活を處理することに反對し、一の強國か其實力に由り、就中最も露骨なる武力に由り、他の弱小國を自己の道具の如く利用せんとすることは、最早や進歩せる世界人類の道義的觀念と一致せざることか此戰爭に由て明白となつた。文明國の内部に於ては貴族階級か平民に對して權力を行使する所の封建制度は夙に倒れたが、今次の世界戰爭は國際間の封建制度の打破に着手したものであつて、今後は敵の側に於けると同様に味方の側に於ても進歩せる異人種異民族の獨立自主か實現せられるのである。此の如く後進の民族か先進國に對して次第に獨立自主し、民族と民族との間に於て貴族と平民との如き征服者被征服者の關係を除くことは形式の上より國際的民衆

化と云ふへきてあるが、此國際的民衆化たるや實に國內に於ける民衆化に其根原を發して居る。此事は從來民族的自覺に付て屢述へた所であるから茲には其要點を述ふるに止める。

人類社會の眞の進歩は常に文化か多數者に行き渡ること、相伴ふて起るものである。例へば我國に於て王朝時代には學問と云へは漢學であり、宗教も外國輸入の儘のものか行はれたが文化か一層普及して地方豪族の間に擴まり武家時代となるに及んで國民文學か盛んとなり、宗教も日本民族的のものとなり、更に町人に文化の普及するに従ふて平民文學か起り、之か爲め我か一般文化の上に民族的個性か益發揮せらるゝことゝなつた、歐洲に於ても上古は希臘羅馬の思想及文字か各國を支配して宗教も世界的であつたが、更に文化か下層に普及するに従ふて各國の國語及國民文學か起り、基督教さへも各國に於て特殊化することを防ぐに困難となつて來た。十九世紀に於て特に民族的自覺か急速に發展したのは、各國封建の遺習を除て立憲政治を行ひ、即ち四民平等の民衆政治を行ふたことゝ相伴ふて居る。只た輓近先進諸國の無產者階級か向上するに従ひ國家を否認して世界主義を高唱するに至り、之か爲めに社會主義は即ち世界主義なりと解せらるゝか如き有様となつて居た。此點に付て予輩は屢各國の無產者か眞に世界主義者でなく、彼等は有產者の利益維持に偏するか如き國家の制度を否認するも、根本より民族の個性を無視し其特色を蹂躪するか如き強制的畫一を主張するのではなく、實は彼等こそ最も頑強なる民族主義者であることを指摘した。此事は最早や今次の戰爭の經過に由て充分に證明せられたことゝ信するが、特に注意すべきは露國に革命か起つて社會主義を行ふと同時に、其内に包容せられて居た異民族か

獨立自主するに至り、又目下埃匈國及バルカン半島諸國に於て政治上の民衆化が行はれると同時に急速に民族分立を行ひつゝあることである。世界交通の進歩するに従つて各國民は世界化すると云ひ得るが、此世界化たるや單純なる畫一や模倣でなく、各國民の個性を培養助長するの作用を爲し、従つて此世界化は各國民の個性を通して複雑なる發展を示すものである。

此の如く軍國的の帝國主義を打破して國際的民衆化の行はるゝ根原は各國內に於ける民衆化に存するか、國際間に於けると國內の階級間に於けると問はず、此民衆化なるものは世人の往々に解する如く單に平凡化又は惡平等を意味するものではない。國內に於て下層民が民衆化を要求するは公平に各人の生存發展の機會を均等ならしめんとするのである。例へば貴族又は富者の子に生れたるの故を以て平民又は貧者の子に對し當然に有利なる發展の機會を有すと云ふか如き不公平に反對し、各人互に平等の生存權を認むることによつて、各自の有する能力を自由に發展し、以て共同生活に最大の貢獻を爲さんことを主張するのである。種々の民衆化運動の中には往々進む者を抑へて後るゝ者と平等ならしめんとするか如き要求も起つて來るのであるが、此の如きは眞に健全なる民衆の要求する民衆化ではないのである。國際間に於ける民衆化の要求も亦同様であつて或國民が征服者なるか故に被征服民族に對して自己の國語を強制し文化を強制するか如き不公平を除き、各民族互に平等の生存權を認めて各自の有する特別の能力特別の文化を自由に發展せんとするのである。而して一民族か他の民族を征服支配することを目的とする軍國主義が行はるときは、征服國民の内部の組織も階級的となつて民衆化を妨げるのであるから、今後被征服民

族が解放せられたならば、征服國の内部に於ける民衆化も益發展することとなる。或は戦後の文明國に於ては勞働よりも資本の缺乏を感ずること甚しく、従つて資本の價值が勞働の夫れに比して高まるから、戦後の無産者は戦前に比して其地位を下たし、民衆化の潮流に逆轉を生ずしとの説もあるか、予輩の同意し得ざる所である（本誌第五卷第三號戦後に於ける軍國主義と民主主義参照）。只た戦後の各國に於て如何なる方法と程度との民衆化か行はるべきやは各國特有の事情に由て定まるものであつて、或は戦勝國の中にも革命に由り強力に訴へて急激の民衆化を行はんとする場合が生ずるかも知れぬ。

二

今後の國際交通の原則は平和會議に於て決定せらるへきてあるが、其原則は軍國的の帝國主義を打破したる根本精神を實現し發展するものでなくてはならぬ。故に其原則は軍國主義の復活を防止すると同時に、此主義と同しく自主力ある後進民族の自由の發展を害せんとする所の新なる經濟的帝國主義の跋扈を制するものでなくてはならぬ。目下各國の識者の間には國際聯盟を結んで永久の平和を確立するの可否か熱心に考量せられつゝある。此問題は無論重大なものであるが、併し國際聯盟は一の形式に外ならぬ。國際間に利害の大衝突の原因が存在するときは、如何なる形式を設くるも眞に平和を確立することは出来ない。加之國際聯盟の主なる内容は各國の軍備を制限し、其武力的行動に束縛を加へることであつて、軍國主義の復活を防ぐことを中心目的とするやうであるが、諸大國に於ける民衆化の發展の爲め今後再び軍國主義を跋扈せしむるの危険は

割合に少ない。之に反して經濟的の帝國主義の跋扈する危險は甚た大である。特に諸大國の民衆の覺醒の未だ不充分なる爲めに、彼等も此帝國主義の味方となつて後進民族を壓迫するの危險があり、我國の如きも此の新しき帝國主義の爲めに非常の窮境に陥るの危險がある。此の如く今後の國際間の利害の衝突か主として經濟的帝國主義に存するものとすれば、平和會議に於て是非とも此の新しき帝國主義の跋扈を抑へるに足る原則を決定せねばならぬ。

元來帝國主義なる詞は種々の場合に使用せられて居るが、一般に強大の勢力を有する國民か其力を濫用して自主能力ある他の民族の自由の發展を妨ぐることに由り自から利益せんとすることを其特質とする。自主力ある民族の個性を没却して之を統一せんとするの主義は必しも或國民の利益を本位として立論せらるゝものゝみてはない。彼の一部の世界主義者の主張の如きは其一例であるが、此の如き統一主義にして利己的目的を有するときは之を帝國主義と云ふへまである。而して軍國的の帝國主義か一國の武力を基本とするに反し、經濟的の帝國主義は主として其經濟上の力に由り自國の利益を圖らんとするものである。帝國主義の目的とする自國の利益なるものは、物質的文明時代と稱せらるゝ今の世に於ては、而帝國主義ともに經濟上の利益を主とする點に於て一致して居る。此外に軍國主義の方には餘程浪漫的の要素が多く、他の民族に適すると否かを問はず、之に自國の言語風俗宗教政體等の種々の文物を強制することに由て自國の文化を更に強大ならしめんとする者もあるが、而も自國の經濟的利益を増進せんとすることに最も重きを置くことは争はれない。此の如く而帝國主義の差異の根本は目的よりも寧ろ目的を達せんとする手段の

上に存するが、併し今次の戦争は財力と技術の戦争なりとも稱せらるゝ有様であるから、軍國主義も勿論經濟上の力に依頼する所が多いと同時に、經濟的帝國主義も全く武力を閑却せんとするのではない。技術と資本の力に由て維持し得ると稱せらるゝ海軍の大擴張の如きは經濟的帝國主義の特に好んで採用した所である。而して此帝國主義は經濟の最も發達した大國か最も之を實行し易き地位に在るが、併し廣大の領土を有して世界人類に貴重なる天然資源を多く藏する國は、假令へ經濟の發達尙幼稚なりとも其天然資源を閉鎖獨占することに由て他の國民の生存を害することか出来るのである。世界各國民の共同生活に缺くへからざる種類及分量の天然資源は、自國の領土内に在りとして之を自國に獨占して他國を害することは諸國民互に平等の生存權を認めて世界の共同生活を營むの原則を破るものであつて、他國を侵略すると同じく帝國主義と云はねはならぬ。

從來經濟的帝國主義は多くの場合に武力を併用したのであるが、其經濟的手段の主なるものを擧げれば、第一に資本の豊富なる國か資本乏しき國に對して投資を行ふに方り、其投資事業に直接に附屬せざる種々の權利を獲得することである。例へば先進諸國か支那の或鐵道に投資すると同時に、投資を理由として其鐵道沿線の廣大なる區域内に種々の企業を爲すの獨占權を獲得するか如きである。米國の或石油業者は支那の或地方の石油鑛に投資することに由り、支那全體の石油發掘權を獨占せんと試みたと傳へられて居る。此の如く投資の理由として區域的又は事業的の獨占若くは優先權を獲得し、即ち區域的又は事業的に人爲の勢力範圍を作ることには、事實に於て

後進國の領土分割である。此種の利權獲得か後進國民自身の自由發展を害するは勿論、他の諸國民の後進國に來つて其富源を利用することを妨げる。故に一面に於て政治的又は形式的に其國の領土保全を約し、又は門戶開放機會均等を約するも無効とならざるを得ないことは從來屢論した所である。

我國は今後東洋南洋方面就中廣大なる支那及西比利亞の富源を利用することに由て生存發展し得るのであるが、若しも先進諸國か此方面の富源に對して上述の如き獨占權を獲得するときは我國の發展は永久に阻止せられ、即ち特種の飢餓戰爭の爲めに萎縮せざるを得ない。今次の戰爭に由り歐米諸大國は莫大の資本を蕩盡したとは云へ、尙ほ其資本力は到底我國の比てはない。『故に眞に支那及西比利亞を保全して世界の平和擾亂を防かんとすれば、平和會議に於て是非とも此種の經濟的侵略を禁止せねばならぬ。戦前の如く歐米に於て資本の過剰か巨大であるならば、此の如き規約を立てることは實際に困難であるが、今後當分は歐米一般に外國に投下すべき資本の餘裕か少ないから、此種の規約を立つことは容易である。世間或は歐米に海外投資の餘裕少なくして我國に其餘裕の相當に存する今日こそ最も獨占權獲得の好機會であるから、上述の如き利權獨占の禁止を約することは自繩自縛の愚を演ずるものであると反對する者か少なくない。併し世人は戦後の歐米の資本の缺乏と我國の資本の餘裕とを共に過大視する弊に陥つて居る。英米の如きは一日六七千萬圓以上の費用を要する戰爭を今後尙ほ相當に永く繼續するの實力を有する程であるから、我國か資本の力に訴へて之と競争せんとすることは甚た無謀であるのみならず、此規約

を立つることは支那及西比利亞の門戸を開放せしむると同時に、重大の富源を有する世界の諸大國をして齊しく門戸の開放を實行せしむるの前提として必要なのである。我國を初めとして天然資源の乏しき世界の諸國は、之を豊富に有する國をして門戸開放を行はしめ富源領有國にも他の諸國にも之を獨占せしめずして各國に公平の利用を認むるの原則を立つることか生存上の必要であるが、若しも我國か支那や露西亞の多くの反對論を排して其一黨一派と結托し、獨占權を獲得して僅かの勢力範圍を作ることを敢てするならば、他日支那や露西亞に政變か起つて外人に對する富源閉鎖主義を實行すること、即ち國家自身か外國に對して之を獨占することに反對するの理由を失ふ。又我國か此の如き利權獲得を爲すことは實際に此等諸國をして外國の侵害を防ぐの急を感せしめ、其富源閉鎖の實行を刺戟することを免れない。從來列國か支那に於て獲得したる獨占權を今日直ちに全部破毀することは實際に困難であらうが、平和會議に於ては少くとも今後新たに之を獲得することを絶対に禁止せねばならぬ。

三

經濟的帝國主義の重要な武器の他の一は、廣大なる土地と富源を領有せる國民か不當に之を閉鎖獨占して他の諸外國の發展を妨ぐることに、恰も國內に於ける獨占業者か國民一般を苦しむるに類するの態度を採ることである。此の如き富源の獨占には種々の場合があつて、例へば白人特に英人か早く世界各地の重要部分を領有して有色人種の來住を排斥するか如き、又廣大なる未開の富源を有する國か妄りに他國人の投資企業を制限するか如きは從來汎く行はれて居る所であ

るが、其富源開發の結果たる原始生産物の輸出を制限し、特に之に輸出税を課して他國の之を利用することを妨ぐる獨占方法は今日まで幸にして多く行はれず、只た財政の幼稚にして輸出税に依頼するの必要を感じる南米や支那朝鮮には一般の輸出に課税し、又生産物の性質か外國市場に於て獨占的勢力を有する場合にも輸出税を設くるを常とした。即ち輸出制限は從來財政上の手段として行はれたと云ふべきである。然るに此戰爭に於て各國が戰時緊急處分として廣汎なる輸出の禁止制限を行ひ又輸出税をも設くるに至つたが、戰後に於ては財政上の理由の外に經濟上及社會上の理由よりして原始生産物の輸出制限か汎く行はるゝ危険か起つて居る。

戰爭中重要の原始生産物は世界的に大缺乏を生じ、従つて之を有する國か其輸出を禁止制限し又戰時財政を維持する爲め之に輸出税を課したるか如きは、國家の生存上已むを得ざるの處置たることを認めねはならぬ。戰爭の爲めに刺戟せられたる各國の自給自足の思想か平和の恢復と共に漸次冷却し、又世界の資本か再び豊富となつて各地の豊富開發か盛んに行はれ、従つて重要な原始生産物の供給も豊富となるに至れば、此種の富源獨占主義も自から弛緩するであらうが、併し一旦先進諸國に於て始められた此獨占主義は今後永く其經濟政策上の痕跡を留むるの危険かある。廣大の富源を有する國か其開發を急ぎ、自國の需用以上に大量の生産を行ふて之を低廉に世界人類に供給するよりも、寧ろ其開發に要する資本勞働の一部を割て之を其原料の製造に投し、以て自國の工業を發達せしむると同時に他國の工業の發達を妨げることか、自國の永遠の發展に有利であると云ふ思想は從來より存在する所であつたが、若し今後世界人類の生存に必要な富源

を多量に有する國に於て此種の思想が優勢となるときは、富源の乏しき他の諸國は自己の生存權を主張より之に反對し、己むを得ざる場合には武力に訴へても此獨占主義を打破せねばならぬこととなる、即ち未開の富源を多大に有する國か之を閉鎖獨占するの主義にして是認すべきものとするれば、一面に於て生存發展に必要な富源を有せざる國か軍國主義を行ふことをも是認せねばならぬこととなる。現に我國の輿論を見るも一面に軍國主義の打破を叫び乍ら、他面には諸大國の自給自足論の盛なるを見て之に備ふるか爲め我國も自給自足主義を採るの必要を認め、而も國土狭少にして富源の貧弱なる我國か自給自足を行ふことは事實上不能なるか爲め、大に軍備を充實して東洋南洋に政治上の優越權を占め、以て此方面の富源を我國に獨占して諸大國の自給自足主義に對抗すへしと云へる矛盾した主張が行はれて居る。實に此點に於ては舊き軍閥官僚の思想と民間の自由思想家とが手を携へて進むの狀を呈し、之か爲め我國の對支那策の如きも常に不徹底なる機會主義に墮して居るのであるが、之に類する現象は獨り我國に止まらず、歐米に於ても存在して今後は一層盛んとなるの危険がある。

從來世間には有産者を以て帝國主義の張本人と見做すの傾かあつたが、併し米國の資本家は低廉なる勞働を得て自國の勞働者の跋扈を抑へる爲めに有色人勞働者の來件を歓迎し、露國の貴族的大地主は其私有の富源を開發する爲めに外人の投資企業を歓迎したと云ふ如く、又一體に有産者は其生産したる原料品に對して内外人を問はず、最も最高を提供する者、即ち最も缺乏を感ずることの大なる者に汎く之を與ふると云ふか如く、種々の點に於て頗る世界的であつて、必し

も彼等か只一の帝國主義者でなく、一面に無産者も外國労働者の排斥を始めとして種々の點に付き頗る帝國主義的であることは予輩の屢論した所である。今次の戦争に於て歐米諸大國は種々の企業及財産を私人の手より國家に移し、國有國營の範圍か著しく擴張せられたるが、今日各國の無産者は戦後に於て獨り戦時中の緊急處分として設定せられたる國有國營を維持するに止まらず、更に大に其範圍を擴張すへしと主張しつゝあつて、其一般の論調を見るに從來の個人資本家の如く自己の利益の爲めに内外人の差別を立てず其企業と財産を利用すへしとは云はず、先づ之を自國民の利益の爲めに利用すへしと主張し、之か爲めに他の諸國民か如何なる損害を蒙むるやに付ては多く顧慮しないやうである。既に白人諸國民相互の間に於ても此の如く利己排他の傾向か強いものであるとすれば、更に進んで異人種にも平等の生存權を認め、白人の過去に於て領有せる世界の大富源を異人種にも平等に開放すへしと云ふ徹底せる議論の有力ならざるは怪むに足らぬ。國際關係より見れば目下先進國の無産者間に有力なる社會改造意見は、個人資本主義に代ふるに國家資本主義を以てせんとするものと評し得べき有様である。故に戦後歐米諸大國に於て政治上及經濟上の民衆化か盛んに行はれ、特に社會主義か實行せらるゝことゝなつても、我國の如く天然資源に乏しき諸國は安心することか出來ず、又世界の平和の確立も多望なりと云はれない。文明國民か甚大の犠牲を拂つた此大戦争をして人類の歴史に有意義ならしめんとすれば、此際各國民は更に大に反省せねばならぬ。獨逸の軍國主義を打破する爲めに各國の無産者か生命を捧げ有産者か財産を捧げて努力した眞意義に付て更に深く考察せねばならぬ。特に各國の無産者

は此戦争の爲めに最大の犠牲を拂ひ、又今後の平和確立に付て最大の利害を感ずる者であるとするは、此際彼等は大に反省せざるを得ないのである。私有財産制度には對内對外の經濟關係を處理するに付き種々の缺點もあるが、併し個人に代つて國家公共團體か地主となり資本家企業家となつて外國に對立する場合に於ても、世界各國民の平等の生存權を認め、人類全體の共同生活を尊重するの念か一層高まらなくては、從來の私有財産制度の時代に比して世界の改造か有望とならす、寧ろ多くの點に於て一層不都合を生ずるの危険がある。吾人は善良なる個人となつて他の個人に對するか如く、善良なる國民となつて他の國民に對するにあらされは、自他の永遠の平和と進歩とは望まれない。前に述へし如く民族的又は國際的民衆化は國內の民衆化の結果であると同時に、國內の民衆化も國際的民衆化に由て自由に發展し得るものである。故に今後の國內の民衆化の進行は國際的民衆化を妨ぐるか如き自殺的方向を採つてはならぬ。

一 國內に於て個人の生存發展の基本條件を均等ならしむるの困難なるか如く、自主能力ある世界の諸民族をして均等の生存條件を得せしむることも困難であるが、併し國內に於ては所有權に種々の制限を附し、特に近來は各國大に社會政策を行ふて國民全體の發展に不利を及ぼすか如き不公平を除かんとするか如く、國際間に於ても世界の天然資源の大なる部分を領有する所の少數の大國は、世界人類の爲めに其富源の管理に付き大なる責任を負はねはならぬ。諸大國か其原料品輸出に付て自由貿易を行ふ場合に於ても、自國民は産地に於て直ちに之を消費すると云ふ天然の優越的地位を占め、他の國民か多くの運賃と時間とを費して之を輸入利用するに比すれば大なる

る利益を當然に享受する者である。大國民が此の如き自然的の利益に満足せずして更に人爲的に他國民の利益を害する獨占政策を探ることは、世界人類の名に於て吾人の飽くまでも反對せざるを得ざる所である。或は人類の共同生活に重大關係ある富源を有する國か一面に富源獨占策を探るも他面に外人の移住及企業の自由を認めることゝすれば、大に其獨占の弊害を緩和し得るやうであるが、後に論ずる如く各國をして外人の移住及企業の自由を認めしむることは頗る困難であるのみならず、富源の乏しき國民も其の富源なる國に大規模に移住し企業することは決して容易でない。故に吾人は重要原料の輸出に付て自由貿易を必要とするのである。

人口稠密にして天然資源の乏しき我國より見れば勿論、世界人類の公益より見ても、平和會議に於ては天然資源を多量に有する諸大國の獨占主義を抑制し、先づ移住の制限を成るべく寛大ならしめ、又其國に於ける外人の投資企業に付ても、内外人合辦の如き條件を備ふるものは成るべく汎く之を認めることゝせねばならぬ。特に從來の如く白人諸國に於て外人の移住及企業に付き不公平なる人種的差別待遇を爲すことの不當なるは多言を要せざる所であり、若し此等の事項に付き已むを得ずして制限を加ふることゝすれば、須らく人種民族の差別を問はず、凡ての外人に對して均等に制限すへきてある。只各國民の獨立自主の團體的生活を認むる以上は、其國內に於ける外人の住居、勞働、企業に付て全然内外人無差別を勵行することは困難であるが、併し原始生産物就中重要原料品に付ては是非とも内外無差別の原則を確立することを必要とする。其結果後進國に於て財政上の必要より設定せる原料品輸出税は漸次之を廢止するの方針を探り、夫れまで

の經過的方法として原料品に輸出税を課する場合には、一面に同額の内地税を之に課することゝして内外平等の原則を實行することゝし又諸大國が主として政治上經濟上の原因より輸出税其他の方法に由り新たに輸出制限を行ふことを禁止せねばならぬ。而して原始生産物に對する輸出制限の中、食糧品に對すると原料品に對するとは或程度に差異の存することは之を承認せざるを得ない。例へば支那が防穀令を行ひ、又平時歐洲大陸諸國の中にも不作の場合に穀物及家畜飼料の輸出を禁止するか如きは、全く國民生活の急迫を救ふて安寧秩序を維持する爲めであつて、他國の經濟の發展を害する目的を有するものてなく、加ふるに穀物は汎く世界に生産せられるものてあるから、或一地方に輸出制限が行はれても、他の地方の供給に由り之を補足すること必しも難くない。然るに重要原料品の生産は穀物の如く普遍的に生産せられず、少數の地方に集中的に生産せられ、例へば棉花の世界的供給權は米國と印度とに存し、羊毛に付ては世界人類は濠洲南亞及アルペンチンに依頼するを要し、生絲に付ては我國と支那とか重要供給者であり、黃麻は各國之を印度に仰かねばならぬ。故に重要原料生産國は世界の獨占者として他國民の膏血を絞ることか必しも不能でない。是れ平和會議に於て重要原料品の獨占を防止するの特に必要なる所以である。

我國の生存の爲めには汎く世界各地より自由に原料を得なくてはならぬ。世人が往々支那の天然資源を自由に利用し得れば我國の發展が保障せらるゝ如く論するは誤解であつて、我國は更に複雑にして大規模の發展を爲さねばならぬ。併し隣接せる支那及西比利亞の富源が我國に取つて最も重要なことは争はれない。從來先進國は支那に對して門戸開放を主張し、又支那に於ける

諸外國の活動に付ては機會均等の原則を立てたのであるが、此事たるや先進諸國が廣大なる未開の富源は之を其領有國に於て獨占すべきものでなく、又固より一二の他國か之に對し獨占又は優越權を主張すべきものでなく、其利用に付ては全人類が公平に參加し得ると云ふ國際道徳上の思想を根據としなくてはならぬ。支那が弱國なるか故に特に諸強國か之を支那に強制するものと解してはならぬ。若しも我國が英米露等の大國に對しては其富源獨占を認むると云ふ不徹底の讓歩を爲すときは、早晚支那も同一原則の公平なる適用を主張し、決して永く屈辱的の特別扱に満足することはない。況んや支那の思想界に於ては由來自給自足論が優勢であつて、假令へ財政上の原因に出つるとは云へ、夙に一般的輸出税を設けて事實上外人の富源利用を制限し、近來は利權回收論、外人企業禁止論、礦物就中鐵礦國有論の如き排外思想が盛んとなつて着々之を實現せんとしつゝあるから、若しも平和會議に於て先進國に對し富源獨占を認めたらば、支那は急速方を以て排外閉鎖の國策を進め、以て我國の生存を危ふするに至るを免れない。曾て論した如く我國が今日に數倍する實力を有し、獨逸以上に強大な國であつても、尙ほ支那併呑や支那の利權獨占主義を實行するには餘りに微力であるに反し、我國の實力が今日よりも尙ほ弱くとも、世界人類の公益即ち國際間の正義を主張するには充分の力がある。豫てより予輩の主張せる如く我國が此公明なる主張を世界に公けにして、聯合國の戰爭目的も結局此主張の實現に在ることを認めしめ、二十世紀の世界歴史を作るに付て我國か之を指導する底の識見と勇氣とを示したならば、此大戰爭か我國の爲めにも人類一般の爲めにも大に有意義となることか出来るのであるが、不幸にして

開戦以來我國の態度の曖昧不徹底なるか爲めに今日我國は獨逸に次て世界の憎惡を受くるか如き狀を呈して居る。尙ほ平和會議に於て獨逸植民地の處分は重要な問題となるのであつて、英國の輿論は飽くまで之を自國に領有することを主張しつゝある。我國は敢て英國の領有に反對するの必要を認めないが、併し既に世界の面積の大なる部分を領有する英國をして、更に廣大なる獨逸植民地を領有せしむることゝすれば、同時に富源開放の原則を確立するの必要か益大となる、從來英人は其の建設せる植民地に於て極端に異人種排斥を行ふの過失を敢てしたが、併し其富源に至ては之を汎く世界に開放し、以て人類全體の爲めに天與の富源の管理者たる責任を相當に盡したことを認めねはならぬ。然るに若しも、戰爭以來實行しつゝある閉鎖獨占策を更に戦後に繼續し發展せんとするならば、英國は最早や道徳上獨逸植民地を領有するの權利を有せざるものと云はねはならぬ。

四

世界の平和を維持して人類の共同利益を進めるか爲めには、輸入に付ても各國か成るべく門戶開放主義を採ることを利益とするが、併し後進國か經濟上の發達を圖るか爲めには保護貿易を採るの已むを得ざる場合もあり、又後進國か適當の保護策を採つて其經濟の進歩を圖ることは人類全體の發展の上にも有利である。極端なる自由貿易論者の主張するか如く世界の平和の爲め各國に自由貿易を強制することは、先進國をして後進國の發展を抑壓せしむるの結果となり、即ち先進國の經濟的帝國主義を實現するの手段となるを免れない。廣大なる富源を有する國に向つて

世界人類の爲めに其富源を開放せよと要求すること、或國民に對し其の購買することを欲せざる外國品を強て購買せよと要求すること、は、要求の性質に於て大差あることを認めねばならぬ。又多年各國が保護貿易を行ふて其下に各自の産業が發達しつゝあるに方り、俄かに保護を撤廢して其産業界を擾亂せしむるか如き要求は事實に於て實行するを得ない。

輸入税は各國の任意の決定に委するを必要とするときは、之を平和會議の問題とすることは困難であつて、各國が相對に通商條約を結ぶと云ふ從來の方法に由るの外はない。只た從來各國の經驗せし如く一旦ひ保護貿易を採用すれば當業者の利害關係よりして次第に其保護が過大となり特に其結果として自國にも諸外國にも有害なる獨占的の合同が跋扈するの弊を生し易い。故に平和會議に於ては各國成るべく輸入税に付て慎重の態度を探ることを約するは決して無用の業でない。過大の保護税の爲め盛んに獨占的なる合同が發生して時に世界市場を攪亂する所の米國に對しては各國一致して如上の注意を促かすことを適當とする。我國も既に可なり強度の保護貿易國であつて、此上更に保護の程度を強むることは概して不適當である。世間には戰時に勃興せる新工業を戰後の列國競争に對して保護する爲め大に輸入税を増加すべしと主張する者少なくない。予輩も絶対に其増加の必要なしと主張する者ではないが、併し戰時に勃興せし事業の重なるものは金屬工業と化學工業とであつて、其中の重要な製鐵業及化學染料醫藥品生産業に付ては既に國庫補助や免税の方法が設けられ、又製鐵業は兼てより官營の模範工場が存在して居る。元來此種の工業の生産物は他の生産業に對して生産財たるの地位を占むるものであるから、保護税に由

て之を高價ならしむることは一般生産業の發達を害するの弊がある。故に成るべく保護税以外の方法就中工業金融の設備や工業教育の發展や理化學研究所の活動の如き方法に由り之を助長するを適當とする。戦争以來國産使用主義が高唱せられつゝあるが、營利を目的とする民業に對して國産使用を勧誘するも効果を挙げ難いから、國內に於ける最大消費者たる國家公共團體か成るべく國産を使用して其發達を圖ることか適當である。若し我國か新興事業を保護する爲め更に大に輸入税を引上げて、外國品を排斥しつゝ、諸外國に向つて門戸開放を要求するか如きは矛盾である。支那は年來其輸入税の引上を希望し、今日は利害關係を別にして獨立國たるの體面上より所謂稅權恢復を要求することに於て官民一致して居るのであるが、支那の輸入税引上に由て最大の打撃を蒙むるものは我國の工業であるから、歐米諸國か此問題に付て支那に同情的態度を探るに反し、獨り我國は日支親善を口にし乍ら其稅權恢復運動を抑へざるを得ざる苦境に陥つて居るのである。若し我國にして此際大に輸入税引上の方針を採ることゝすれば、我國か支那の稅權恢復に反對することは道徳上困難となる。論者は或は國際關係を處理するには實力を以てし得へきものであつて道徳上の顧慮を必要とせずと論ずるかも知れぬが、此の如き意見は舊式の帝國主義者の世界觀であつて、吾人は此世的界大戦争に由り世界人類の共同生活に新紀元を劃し、各國互に平等の生存權を認むるの原則を確立し、之に由て各國の富源の開放を實行せしめんとするのである。單に目前の利害關係より見るも今日我國の急務とする所は保護税を増して小額の國內需用を自給するよりも、諸外國をして我輸出に對し大に門戸開放不行はしむることである。

茲に各國の今後の通商條約に付き平和會議に於て是非とも一般に約定し置くべき重要な一事か
發つて居る。即ち戦後に於ては各國の通商條約に關して無條件最惠國主義を採用すべきことであ
る。保護貿易論者は此主義か一體に保護策の實行を妨げ、特に個々の相手國と任意の利益交換を
行ふことを不能ならしむる爲め大に之を批難するのであるが、併し各國か相互主義を採つて諸外
國の待遇に厚薄の差を附することゝなれば國際間に非常の紛擾を生し、一と結んで他を排するか
如き陰謀か隨所に行はれて舊時の宮庭的秘外交に類するの弊か盛んとなり、其結果強國か近隣
の小弱國を事實上併呑するか如き事實も起つて、國際關係か亂麻の狀を呈するに至るを免れな
い。特に今次の戰爭に由り民族の自決自主か行はれる結果として多數の小邦か分立するに至ると
きは、此等小邦相互の間に紛擾を生し易く、又他の強國か之に乗して互に野心を逞ふせんとする
の危険か甚だ大となるのであるから、此際通商上には嚴正に無條件最惠國主義を行ふて互に相結
ひ相侵すの危険を除かねはならぬ。從來の世界は小數の大國に勢力を集中し、其勢力の均衡に由
て世界の平和を維持する仕組となり、部分的には例外あるも世界を通して約半世紀の太平を樂し
むことを得たのであるが、今後先づ露墺獨土の諸大邦か分裂し、更に一時は兎も角終局は世界的
大英帝國の結束も恐らく大に弛緩することゝなるであらうが、此の如き小邦分裂の新世界には最
早や數大國の勢力均衡と云ふ舊き仕組に由て平和を維持したるか如き方法は適用せられないか
ら、此新世界建設に着手する所の平和會議に於ては平和維持の新原則を確立することの必要なる
は明かであるが、其新原則の中で最も重要なるものは富源の開放と無條件最惠國主義とである。

要するに各國の保護貿易の過度に陥るの弊を防ぐか爲めにも、又各國互に諸外國に對し一視同仁の態度を採つて世界の平和を保つ爲めにも、無條件最惠國主義を一律に厲行することを必要とする。特に從來の如く世界文明國一般が無條件最惠國主義を準奉せるに方り、獨り北米合衆國及之に倣へる南米諸國が條件付最惠國主義を採つて之に臨み、以て汎く文明國の市場に最惠待遇を受け乍ら、自國は之に對して條件付きにあらざれば最惠待遇を與へないと云ふか如き卑劣の態度は人類の名に於て之を嚴禁せねばならぬ。又我國が東洋に於て門戸開放機會均等の原則を實行するど同じく、米國が墨其西古以南全米諸國に於て同一の原則を準守すへきは言を待たぬ。

五

以上に述べた我國の主張は何れも聯合諸國及米國の政府が責任を以て其國民及全世界に公言した所の戰爭目的なるものより當然に生し來る結論であり、何等新しき要求でなくて單に過去の公約の履行を求むるに過ぎない。又我國が之を主張するには世界人類の名を以てするを得べき事柄である。只た我國が今日之を主張するに付ては此戰爭に關して我國が聯合國と締結せる條約の上より何等かの束縛を受くることなきやを考へねばならぬが、世人は往々我國が聯合國側の巴里經濟同盟に加入せることを以て、我國が上述の如き主張を爲すことに制限を加へらるゝことなきやを問題として居るやうである。此同盟條約の中には戦後一時的及永久的に中歐同盟側に對して經濟上不利の待遇を與ふると同時に、聯合國相互の間には中立國に對する以上の好待遇を與へて、經濟上の互助を行ふことを規定してあるが、既に屢論せし如く戦後も中歐側に對して一種の「ボ

「イコット」を行ふと云ふことは、明かに武力に代ふるに經濟力を以てして戰爭を繼續することを意味し、此の如き特種の戰爭を繼續する場合は、聯合國の戰爭目的か武力に由て達せられず、即ち獨逸及之に従屬する中歐諸國の軍國主義を破ることか出來ず、之か爲め武力戰爭を休止せる後に於ても獨逸側か依然として其對外經濟活動を侵略手段に供する場合に限るべきことは、同盟條約の諸條項に於て獨逸側の不當の侵迫又は不正の競争に對抗するか爲めにと云ふ文句の存することを見て明かであり、又道理の上より云ふも眞に聯合國か獨逸側と友情平和を恢復する上は、之に對して經濟手段に由り戰爭を繼續すると云ふことは不能である。聯合國は如何なる犠牲を拂ふも、特に武力にて不可なるときは經濟力に訴へても、獨逸の軍國主義を打破せされは止まずと決したのであるから、今後平和會議を開て之と國交を恢復することありとすれば、其は必らず獨逸の軍國主義か打破せられ、從つて之に對し經濟戰を行ふの必要消滅したる場合でなくてはならぬ。故に予輩の上述の主張は何等條約上の制肘を受くることなくして提唱し得る所である。加之此同盟條約の戰後に關する條項の中、軍國主義と戰ふて平和の確立を目的とせる聯合國の間には天然資源を共同に利用し、又交通を便にして經濟上互に相助けると云ふ個條の存することは、即ち本來平和の目的を有する諸國の間に於て今後當然に存立すべき經濟關係の如何なるものたるべきを指示したものであつて、此の如き條項の存することは實に聯合國及米國の戰爭目的を公示せること、共に吾人の主張を裏書きするものに外ならぬのである。

吾人の以上の主張と日英同盟との關係に付ても茲に一考するの必要がある。目下米國政府に於

ては勿論、英國政府に於ても熱心に國際聯盟を主張して居ることである。從來我國の歴代内閣の外交は日英同盟を樞軸とし、英國の方に由て國際間に於ける地位の安固を圖り、又此同盟の蔭に隠れて極東に小武力小財力を振ひ來つたのであつたが、既に英國が率先して國際聯盟を主張する以上は、日英同盟は最早や實質に於て終了したものである。否な今日の如く露國が先づ勢力を失ひ續ひて獨逸も勢力を失つた以上は、形式上の存続に係はらず實質上には日英同盟の效力は消滅する筈である。故に今後の我國は全く獨力を以て世界列國に對立せねばならぬのであるが、此獨立の基本を爲すものは國際的正義の主張を内容とせる國民の愛國心より外にはない。否な我國民にして國際的正義を國是として立つならば、世界人類が盡く我味方であり、従つて我國は世界に瀾歩することか出来る。我國が此態度を採つて初めて支那や露西亞の信用を恢復し、世人の希望する如き日支親善や日露親善も實現せられるのである。或は一部の論者の想像する如く今後の世界が英と米との競争舞臺となることありとするも、我國は決して何れの一方にも偏してはならぬ常に公平に平和と正義との擁護者として立たねばならぬ。英國は既に日米兩國の紛争に關しては同盟條約の責任を免れんとする英米仲裁條約を結んだことあるのてあるから、今後我國が英米の紛争に關して中立を守むるに付ては何等の遠慮を要しない筈である。

六

我國が此の如く平和會議に於て列國の宣言した戦争目的の徹底的履行を要求し、世界人類の名に於て正義と平和との基礎條件の確立を主張することは、實に我國の道德振興に重大の關係を存

する。由來我國民は對外國係に付て寧ろ神經過敏の誹を受くる程に鋭敏であり、従つて對外國是と國民道德とは密切不離の關係を有して居るのであるが日露戰爭時代までは新興國民としての元氣が充溢し、國民生活か一體に幼稚ながらも緊張して居た。是れ當時まで我國民は歐米強國の不當の壓迫に對して自國の正當の權利を主張することに全力を注中し、即ち人心の奥底に國際的正義の主張か存在し、此正義の主張か實に熱烈なる愛國心の殆んど只一の内容を爲して居たからである。然るに日露戰爭に由り獨立國としての基礎か固まつて以來の國民生活の發展を見るに、智識と經濟とは相當に進歩を呈したが、道德上の活力には頗ふる弛緩し廢頹した點か現はれて來た。本年の米價暴動の如きも國民の上下を通して道德的に廢頹したことを示すものと見るべきことは既に論じた所であるが、一方に對外國是を見るに軍國主義か全盛を極め、更に經濟の進歩に由て財力の餘裕の少しく發生するに従つて經濟的帝國主義も主張せられ、内政に於て獨逸流の模倣の盛なるか如く、外交にも獨逸流か模倣せられた。其結果我國に接觸する支那や露西亞に於て極度の排日思想か起つたのみならず、世界を擧つて我國を第一の獨逸と目するか如き勢となつた。對外國係に於て國家か唯物的勢力主義の實行を理想とし、正義や人道を顧慮しない場合に於て進歩しつゝある國民に對し此の如き國家を衷心より愛し、之が爲めに全身を捧げよと要求することとは頗ふる困難とならざるを得ない。日露戰爭後我國に於て人心か頗ふる懷疑的となり、更に進んで非愛國を高唱する者を生ずるに至つた如きは必しも偶然と云はれまい。我國は西洋と異つて宗教か人心を支配する力乏しく、又人道思想の發達も尙ほ甚だ幼稚なるに反し、愛國と云ふ

ことは國民道德上非常に重大の地位を占め、他の諸徳の淵源と見らるゝ程である。此の如く人心歸嚮の中心を爲す所の國家其物の目的か至高至純にして人生に光明を與ふるものたるべきは勿論、國家か其目的を達する所の手段即ち國是と稱するものも、進歩しつゝある時代思想の是認し共鳴するものでなくてはならぬ。西洋に於ては國是を立つるに多少の過誤を爲すも國民道德上左まで重大の不利を生しないとしても、我國に於て此點に過誤を爲すことは國民道德の淵源を混濁せしめることであつて其影響の及ぶ所は甚大である。彼の軍國主義者は何人よりも國民の愛國心に重きを置くことと稱するを常とするが、彼等にして進歩せる國民の心底より共鳴するを難するか如き國是を立て、強て之を國家に擔任せしめんとすることは覺らざるの甚しきものである。而して人心か廢頹するときは其下に起る所の社會運動の如きも險惡の形を採り、眞の社會改善か行はれずして徒らに安寧秩序か攪亂せられ、社會的生活力か無益に消耗せられることを免れない。此の如き國家は外國の侵略壓迫を待たずして自滅に陥らざるを得ないのである。

獨逸の建國を見るに普墮戰爭及普佛戰爭を経過し、我明治維新と前後して帝國の基礎か確立したたのであるが、其後の獨逸に於て智識や經濟は頗ふる急激に發達したるも、道德生活の上には重大の缺點か現はれ、之か爲め世人は往英獨兩國の前途を對比し、英國か世界に覇を稱へて以來百年以上を経過して今尙ほ風紀紊れず、國民に清鮮の活力か存するに反し、獨逸か果して能く英國の半分の永さも其隆盛を持續し得へきやを疑問とするに至つた。獨逸の對外國はか全然軍國的及經濟的帝國主義に由て支配せられ、之を現實政策と稱して英佛外交の迂惡を嘲笑したのであるが、

一面には國內に於ても人心か一般に現實政策的となり、所謂獨逸の普魯西化が行はるゝに従つて唯物的勢力主義か崇拜せられて、目的の爲めに手段を選まざる卑野の氣風か増長し、之と表裏して社會主義は非常の勢力を以て下層階級を風靡し、従つて獨逸國民は物質的活力の尙ほ旺盛を極むる側はら、早くも道德的活力の弛緩を示しつゝあつた。今次の戦争に於ける獨逸の失敗の如きも實は外國の武力の爲めに破られたと云ふよりは、寧ろ自己の暴力に由り自から傷いたと稱すへきである。更に歐洲の小國白耳義及瑞西に付て見るに、嘗て日支兩大國の間に挟まれた琉球や朝鮮の如く、又は近時のバルカン諸小邦の如く事大主義となり、隱險卑屈となることなく、獨立國民としての氣概を有し、其道德的勇氣か頗ふる旺盛である。是には種々の原因かあらう。特に此兩國か永世中立條約に由り其獨立を保障せられて居ることも其重大原因であらうが、之と同時に此兩國は自國存立の必要よりして世界の平和と正義とを維持することを根本の國是とし、國際法を發展せしむることを國民の天職として之か爲めに誠意努力しつゝあつたことか、大に國民道德の振興を助けた爲めてあらう。今日の如く世界一般に民族的自覺か高まり、各國民か平等的發達を爲すことか世界の大勢となつて居る時代に於ては、武力たると財力たるとを問はず、之を濫用し即ち之を暴力として他の國民に加ふることに由り自國の發展を圖るの國是を採ることは、最早や時勢に不適當なることか明かである。

予輩は戦争以來常に我か對外國是を一新して世界の平和と正義とを擁護することを根本方針とし、二十世界の世界歴史は日本國民か自から之を作り出たす程の道德的勇氣を振ひ興して、先づ

極東方面に此根本方針を確立し、更に機會ある毎に歐米をして具體的に汎く此主義の確立に同意せしめ、即ち彼等の宣言する戰爭目的の徹底的履行を要求し、戰爭經過中に於て着々列國の意向を取纏めて置き、平和會議を開く際には實際上既に大體の綱目か出來上つて居るか如き状態に進むべきことを主張し、此の如き努力を爲すに付ては米國の共鳴と援助とを得るの望の多大に存することを認め、一面に我國は戰爭中に火事泥的の侵略を行ふには餘りに微力であるが、世界人類の爲めに正義を主張するには充分に有力であることを主張したのであるが、不幸にして戰爭以來の我が對外政策は概ね反對の傾向を採り來つたことは前に述へし如くである。予輩は今次の平和會議を最後の機會として大に我國が國際的正義の爲めに活躍し、武力的及經濟的帝國主義の撲殺の爲め熱心に努力することを希望せざるを得ない。予輩の主張する所は今日ウィルソンの主張する所と精神を一にするものであるから、我國の如上の努力は決して徒勞に歸するものと見るを得ない。假りに我國の努力が充分の効果を奏しなかつたとするも、之に由て我が國民道徳を振興し、我國の愛國心に尊き内容を與へて激濁たる生氣を生せしめると云ふ對内的効果に至ては甚大である世人が往々我國の世界に於ける天職は東西文明の融合を爲すに在りと云ふか如きも、國民に高遠の理想を與へて道徳の振興を圖らんとするに外ならぬのであるが、此の如き文明融合の天職を盡す爲めにも我國は先づ以て各國民の生存權尊重の原則を確立し、各國民をして其特殊の文化を自由に發展せしむると云ふ國際的正義を擁護せねばならぬ筈である。(完)